

去る五月二十七日に「崔書勉先生日本上陸六〇周年祝賀会」が盛大に行われた。私は先生のお近づきを得てから二〇年になるが、長いようでもあるが、「白馬が走り過ぎるのを、隙間から見るように、ほんの一瞬のこと」のようにも思える。

二〇年前、先生七〇歳、如何に疲れを知らず、頑健で、斗酒なお辞さなかつたか。該博な知識・諧謔、温かな包容力で、いつも多くを教えられた。その源泉のひとつは、先生の歴史に対する強い好奇心と情熱、頑固とも言える史実への密着と執着に寄るものであろうか。

二〇年前の先生の講演録を久し振りに再読したが、新鮮で、新たな感銘を得た。その一部を以下に抜粋してみる。

“「歴史」という言葉自身を見ると、「歴」はクロノロジー (chronology) ですから説明はいらないが、「史」の字については許慎(後漢の学者) という人が解字をしています。多くの漢字は、そもそもどういう意味を持っているのかということ、この「歴史」の「史」を見ますと、「史は、これその中を取る也」、即ち、真ん中を手に取ること、と解字しています。

ではその「中」は何かと考えると、左右の中央が「中」か、上下の真ん中が「中」なのか。人は考えやすくするために「中庸をとるのだ」と言いますが、日本ではこの漢字の日本的読み方をしています。それは、「弓を射て、真ん中に当たる」ことで、「目的」の「的」を書いて「当たる」とも言いますが、これは「本当に当を得たものに当たった」という意味なので、この

「史」の「中を取る」という言葉は必ずしも右から左の真ん中でも、上から下への真ん中でもなく、その重要な部分を意味するのだというものです。……”

“私は韓国で日本研究所ができると、おしなべて、基調演説を頼まれますが、いつも「日本の研究をすることは、即ち、韓国研究の始まりである」と言っています。その理由は先ほど例にとりました、古事記、日本書紀を読みますと、三分の一角が新羅にせよ百済にせよ、韓国の話なのです。古事記、日本書紀は八世紀に世に出され、韓国が一番古い本は十二世紀に出された「三国史記」、「三国遺事」という二つの本です。この当時の、四世紀のへだたりは、大変なものなのです。そんな中で三分の一角が韓国に関する話であるからには、わが国の歴史であるけれども、わが国の姿が出てくることを習うことは、即ち韓国を理解することであり、故に、日本研究所は、必ず古事記、日本書紀を勉強せよ、と言っているのです。（中略）大変残念なことに、いまだ韓国語で古事記の全巻、日本書紀の全巻は本訳されていません。それに対して日本では「三国史記」も「三国遺事」も翻訳されています。特に「三国遺事」などは和歌山大学で、約三〇年間にわたって研究会が続けられています。……”

崔書勉先生のお話は、巧みな話術もあいまって、面白く、鋭く、深く、広く、汲めども尽きることのない泉のように、限りがない……。

お元気な先生のお話を身近に伺える恩恵に、改めて深甚より感謝しています。

二〇一七年六月三〇日



